

子宮収縮剤の使用について

子宮収縮剤は、予定日を過ぎても陣痛が自然に來ない場合や、陣痛が來ても分娩の進行が見られない場合に用いられます。分娩誘発や陣痛増強は、児にとって利益があると考えられる医学的対応によってのみ行われるものであり、病院や医師の都合で分娩誘発をするものではありません。

a. 分娩誘発（予定日を過ぎても、あるいは破水したのに自然陣痛が來ない場合に陣痛を誘発すること）

予定日を2週間以上過ぎると、胎盤の機能が低下し、そのまま放置するとお腹の中で赤ちゃんの状態が悪くなることがあります。これが予定日超過です。したがって、予定日超過にならないように、その前に子宮収縮剤を用いて陣痛を起こします。子宮収縮剤は少量から投与を開始し、分娩監視装置により赤ちゃんの状態を胎児心拍で監視し、子宮収縮（陣痛の強さ）をモニターしながら行います。具体的には、子宮収縮剤を500mlの糖液に溶かして低濃度にし、さらに微量調節のできる輸液ポンプを使っています。したがって、子宮収縮が強くなりすぎること（過強陣痛）は通常ありません。万一そのようなことになっても、投与量を減らせば子宮収縮を弱められますので、子宮破裂や胎児仮死（nonreassuring fetal status）などの危険は十分に回避できます。このように、最新の注意をはらって子宮収縮剤を使用しておりますので、ご安心ください。

また、陣痛がないのに破水してしまった場合（前期破水）には、子宮内感染を防ぐために、赤ちゃんやお母さんの状態を十分に検査した上で、子宮収縮剤を用いて分娩誘発を行います。

子宮口が開いていない場合は、ラミナリア（海草の一種で作ったもの）を子宮口に挿入し、機械的に子宮口を開大させてから陣痛誘発を行います。

b. 陣痛促進（陣痛が弱い場合）

陣痛が徐々に強くなると子宮口は開大し、赤ちゃんは骨盤の中へ下がってきます。しかし、陣痛は來たものの、なかなか強くならない場合があります。このような場合は、赤ちゃんが長時間子宮収縮によるストレスを被り、また、母体も疲労して、胎児仮死や分娩の進行がさらに遅れる（分娩遷延）こととなります。したがって、この場合にも子宮収縮剤を投与します。

私共の病院で分娩を希望されるみなさまへ

すでに妊婦と診断され、お喜びのことと存じ上げます。

しかし「胎児は順調に発育しているのだろうか」「お産を無事に乗り切れるだろうか」など、不安が頭をよぎることがあるでしょう。

妊娠、分娩は順調に進むことが理想的ですが、時には医学的処置を必要とする場合が生じます。しかも産科の特殊性として、その処置は急を要することもあり、その場でゆっくり説明する時間がないことがあります。そこで皆様が分娩に臨む前に、私たちが日常行っている分娩時の対応の仕方をあらかじめ知っていただくことが大事だと思いますので、下記の事項をご理解いただきたくお願いいたします。

① 会陰切開について

私達はすべての産婦さんに会陰切開を行っているわけではありません。

膣壁の伸展が十分でないために、分娩のときに膣が裂けると予想される場合に行っています。

膣壁の縫合には自然に溶ける吸収糸を用いて、可能な限り傷がきれいになるように努力しています。

② 急速遂娩について

分娩中にお腹の中で赤ちゃんの状態が悪くなることもあり、その程度がひどい場合には、急いで分娩しなければなりません。この場合、子宮口が全開で、児頭が鉗子分娩、吸引分娩を行える位置まで下がっていれば、経膣分娩による急速遂娩(鉗子分娩、吸引分娩)を行い、それ以外の場合は帝王切開を行います。

1) 吸引分娩

経膣分娩の急速遂娩法として、吸引分娩を行うことがあります。

児頭に吸引カップを装着し、牽引して胎児を娩出させる方法です。牽引力は鉗子分娩より弱いのですが、あとわずかで児頭が娩出される程度まで下がっていれば、安全にできる急速遂娩法です。まれに頭血腫が生じることもありますが、通常自然に吸収されます。

2) 鉗子分娩

経膣分娩の急速遂娩法として、鉗子分娩を行うことがあります。

その理由は鉗子は正しく使用すれば、安全に確実に赤ちゃんを分娩させることができる方法だからです。赤ちゃんの頬に鉗子圧痕といって鉗子の痕がつく場合があります。

通常、鉗子圧痕は2～3日で消えるので問題ありません。

鉗子分娩の際に、膣の裂傷を防ぐために会陰切開を入れますが、この傷が延長することもあります。このような場合は、会陰切開の場合と同様に正しく縫合すれば、後に問題は残りません。

3) 帝王切開

帝王切開は、妊娠中や分娩中に胎児の状態が悪くなった時や、妊娠高血圧症など様々な合併症、母体疲労など母体の調子が思わしくない場合、普通のお産では母児を救うことが難しいと判断されれば行われます。

現在、帝王切開は手術法や麻酔法の進歩により、安全に行われるようになりましたが、100%安全な方法ではありません。帝王切開では、経膣分娩に比較すると術中の出血や術後の血栓症、感染症の危険があります。このような合併症の頻度は高くありませんが、重症の場合は危険です。日本での妊産婦死亡率は年々減っていますが、帝王切開が関与している頻度は高くなっています。さらに、帝王切開をした場合は、次の分娩で子宮破裂の危険性も生じてきます。したがって、帝王切開を安易に考えてはいけません。私たちは母体と胎児の状態をあらゆる面から十分に検討したうえで、帝王切開が必要と判断したときに細心の注意をはらって施行しています。帝王切開が比較的 안전한分娩様式であることは、このような努力の上に成り立っていることを十分ご理解ください。

③ 夫立会い分娩について

夫立会い分娩は、ご主人様に付き添ってもらい、産婦さんに対し精神的なサポートをしていただき、産婦さんの精神的、肉体的苦痛を緩和することを目的としております。一緒に呼吸法を行っていただき、腰マッサージをして、手を握ってあげ、リラックスさせて、大切な奥さまと出産の感動を分かち合ってください。また、緊急処置時は立ち会えないこともありますので、ご了承ください。

おわりに

分娩は病気ではありません。自然に母児とも安全に分娩が終了することは理想的です。しかし、妊娠、分娩では正常に経過していても、突発的に思いがけない変化が起こることがあります。私どもは、安全な分娩のために日々修練を積んで、必要な処置を適切にっております。

当院で分娩される場合、このような私達の分娩方針を十分理解していただきたいと存じます。ご不明な点があれば、外来、病棟、母親教室などの場で何なりとご遠慮なく、ご質問ください。